

あなたのその力をもって

士師記 6 : 11 - 24



司祭 ヨハネ 井田 泉

2022年2月6日

顕現後第5主日

上野聖ヨハネ教会にて

時は紀元前 12 世紀、イスラエルに王国ができる前のことです。イスラエルの人びとはミディアン人によってひどく苦しめられていました。強大な力を持ったミディアン人が、収穫の季節になると決まって攻め寄せ、あらゆる作物を略奪していくのです。士師記の第 6 章 4 節にこう記されています。

「彼らはイスラエルの人々に対して陣を敷き、この地の産物をガザに至るまで荒らし、命の糧となるものは羊も牛もろばも何も残さなかった。」

イスラエルの人々は、自分と自分たちの生活を守るためにほらあな洞穴や要塞に隠れなければなりません。生存そのものまでも脅かされていたのです。弱り果てた状態の中から、イスラエルの人々は主に助けを求めて叫びました。

ここに一人の若者が登場します。名前はギデオン。今日の旧約聖書日課の最初のところを読んでみましょう。

「さて、主の御使いが来て、オフラにあるテレビンの木の下に座った。これはアビエゼルの人ヨアシュのものであった。その子ギデオンは、ミディアン人に奪われるのを免れるため、酒ぶねの中で小麦を打っていた。」士師記 6:11

場所はオフラというところで、ガリラヤ湖からは南西の方角にあたります。

大きなテレビンの木の陰に、ギデオンの父親ヨアシュの所有する酒ぶね（ぶどうを踏み潰して液状にする、浴槽のような形のもの）があったのでしょうか。その酒ぶねの中でギデオンは小麦を打っていた。5月ごろでしょうか。本来なら収穫の喜びと感謝のあふれる季節です。ところが今は収穫のときこそ大きな危機でした。いつミディアン人が攻め寄せて来るかわからないからです。ミディアン人の目を避けて、不安におののきつつ小麦の脱穀をしている——それがギデオンの姿でした。

そこへ主の御使いが彼に現れて言いました。

「勇者よ、主はあなたと共におられます。」6:12

いったい自分のどこが勇者なのでしょう。酒ぶねの中に隠れて、いつ襲われるかと体を固くして、恐れつつ麦を打っているのです。

「主はあなたと共におられます」という呼びかけに対して、平安や喜びは起こりません。反対にギデオンの心の中に長年積みもっていた叫びが溢れ出てきます。

「わたしの主よ、……。主なる神がわたしたちと共においでになるのであれば、なぜこのようなことがわたしたちにふりかかったのですか。先祖が、『主は、我々をエジプトから導き上られたではないか』と言って語り伝えた、驚くべき御業はすべてどうなってしまったのですか。今、主はわたしたちを

見放し、ミディアン人の手に渡してしまわれました。」6:13

嘆きの訴えです。

「主は彼の方を向いて言われた。」6:14

これまでギデオンに語りかけたのは「主の御使い」と記されていました。しかしここでは「主は」となっています。ギデオンの嘆きの訴えに対して、主ご自身が自らを現されたのです。

「主は彼の方を向いて」と書かれています。不安と恐れと疑問の中にあるギデオンに、主がはっきりと向き合われたのです。

主はギデオンに向いて言われます。

「あなたのその力を持って行くがよい。あなたはイスラエルを、ミディアン人の手から救い出すことができる。わたしがあなたを遣わすのではないか。」6:14

どうしてそんなことができるでしょうか。

「わたしの一族はマナセの中でも最も貧弱なものです。それにわたしは家族の中でいちばん年下の者です。」6:15

主が言われることは不可能なことです。「あなたのその力を持って」と言われても、この貧弱な者に何ができるでしょうか。

「主は彼に言われた。『わたしがあなたと共にいるから、あなたはミディアン人をあたかも一人の人を倒すように打ち倒すことができる。』」6:16

「わたしがあなたと共にいるから」

これが主の答でした。励まされつつもギデオンは、主が言われることと現実の間で立ち往生します。主がそこまで言われるなら、確かな証拠がほしい。

「彼は言った。『もし御目^{おんめ}にかないますなら、あなたがわたしにお告げになるのだというしるしを見せてください。どうか、わたしが戻って来るまでここを離れないでください。供え物を持って来て、御前^{みまえ}におさげしますから。』主は、『あなたが帰って来るまでここにいる』と言われた。」6:17-18

ギデオンはしるしを求めました。ほんとうに主がそれを告げられたのだ、ということを示す確かな証拠なしに、どうしてミディアンを相手に立ち上がるというようなことができるでしょうか。

ギデオンは主への献げ物を用意しました。子山羊1匹と酵母を入れないパンを調^{ととの}えました。彼は、主の御使いが言われたとおりに、肉とパンを取って岩の上に置きました。

「主の御使いは、手にしていた杖の先を差し伸べ、肉とパンに触れた。すると、岩から火が燃え上がり、肉とパンを焼き尽くした。主の御使いは消えていた。ギデオンは、この方が主の御使いであることを悟った。」6:19-22

主は焼き尽くす火をもってギデオンに答えられました。岩から火が燃え上がり、献げ物の肉とパンを焼き尽くしました。主ご自身がその臨在の事実と力を現されたのです。

と同時に、その火はギデオンをも焼いたのではないのでしょうか。不安、ためらい、疑い、無力感。確信できない信仰の弱さ——そのようなギデオンの心を、イスラエルを愛される神が愛の火をもって焼き清められたのではないのでしょうか。

ギデオンはこのとき初めて、自分がほんとうに主ご自身と対面していたことを知りました。恐ろしさにおののきました。

「ああ、主なる神よ。わたしは、なんと顔と顔を合わせて主の御使いを見てしまいました。」 6:22

「主」というところを恐れて「主の御使い」と言っています。

「主は彼に言われた。『安心せよ。恐れるな。あなたが死ぬことはない。』 ギデオンはそこに主のための祭壇を築き、『平和の主』と名付けた。」 6:23-24

「安心せよ。」原文は「シャローム」（平和、安心）となっています。「安心せよ。」シャローム。ギデオンは主のために祭壇を築いて「平和の主」（ヤハウエ・シャローム）と名付けました。主の「シャローム」（安心せよ）という呼びかけに対して、ギデオンも「シャローム」をもって主に答えて、主に従う決意をし

たのです。

この続きは、士師記第 6 章以下をお読みください。

神さまはわたしたちに対しても呼びかけられます。人の救いのために、世の中を少しでもよくするために、主はわたしたちを用いようとされます。わたしたちは恐れ、ためらいます。そのとき、主は「**あなたのその力をもって行きなさい**」「**わたしが共にいるから**」(6:14、16)と言われます。わたしたちが持つのはわずかの力、取るに足りない力です。けれどもあなたのその小さな力、あなたのその力をとおして、わたしが働く、と主は言われます。

祈ります

主なる神様、あなたはかつて助けを求めて叫ぶイスラエルの人々の声を聞き、ギデオンを通して救いの業を行われました。今のこの世界にも、不安や嘆き、苦しみの叫びが満ちています。主よ、わたしたちをとおして働いてください。わたしたちが自分の無力や限界に失望せず、わずかな力であっても、それをとおして働いてくださるあなたに信頼させてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン